

## 第2回千葉市史編纂会議議事録

1 日 時：平成20年2月6日（水） 午後1時30分～3時20分

2 場 所：郷土博物館 講座室

3 出席者：（委員）

吉田会長、野村副会長、白井委員、今井委員

（関係者）

千葉市史編集委員会 三浦委員長

（事務局）

宮野生涯学習部長、本庄生涯学習部参事兼課長、倉田生涯学習振興課主幹、

西郡郷土博物館館長、丸井同館副館長、若菜同館学芸係長、

芦田同館主任主事

### 4 議題

（1）会長・副会長の選出について

（2）平成19年度事業報告

（3）今後の事業予定について

（4）その他

### 5 議事の概要

（1）会長・副会長の選出について

吉田会長、野村副会長が選出された。

（2）平成19年度事業について

事業報告について承認された。

（3）今後の事業予定について

事業予定や進め方について継続して検討していくこととなった。

（4）その他

特になし。

### 6 会議経過

午後1時30分、委員6名中4名着席。本郷委員、安田委員は欠席。

関係者として市史編集委員会の三浦委員長が出席。

司会（若菜係長）より、配付資料についての説明があり、続いて西郡館長より、設置要綱第5条第2項の規定により、この会議が成立していることが告げられ開会。

宮野生涯学習部長が挨拶を行ってから議事に入った。

## 議題1 会長・副会長の選出について

司会が設置要綱第4条2項に「会長及び副会長は委員の互選により定める。」とあることを説明、会長・副会長について意見を求める。

野村委員：事前に打ち合わせすることもできないので、もし事務局に案があれば示していただきたい。

司会：他にご意見が無いようであれば事務局の案を申し上げたい。事務局としては、これまで通り、会長を吉田先生、副会長を野村先生にお願いしたいと思うがいかがか。

全員：異議なし。

司会：では先生方引き続きよろしくお願ひします。新役員が決まりましたので、以後の議事進行は会長の吉田先生にお願いします。

## 議題2 平成19年度事業報告

平成19年度の市史編纂関係の事業について、史料調査収集・整理事業、市史等の刊行事業、編纂普及事業の3つについて担当より報告をおこなった。

その中で、同時に配付した「平成19年度講座の参加状況及びアンケート結果報告」についてもあわせて説明した。

### <質疑応答>

野村副会長：千葉市の文化行政の中で、こうした歴史関係の事業にどのくらいの予算を使っているのか。また他の類似した市町村においてはどうなのか。市民ゴルフ場や郊外の野球場などには随分お金をかけているようなのだが、こうした文化の継承という面で、千葉市の予算のかけ方がどのくらいのレベルにあるのかがわからない。他の類似した所よりかなり多いということならよいのだが、一方では1千億円の予算不足などということが新聞記事に載っていたので、文化行政に対してもそうとう切られるだろうということは予想はしていたが、もしわかったら次の機会でもいいのでそのへんのところを教えてもらいたい。

また、編纂普及事業の関係で、市史研究講座が定員165名に対して応募が217名、初級古文書講座が定員30名に対して応募が91名となっている。中級古文書講座や古文書整理実習はよいが、せっかく興味を持って応募してきている人たちに、今後も継続して興味を持たせるためにはできるだけ多くの応募者を収容する考えを持っていただけたらありがたい。以上、2点を感じたので分かる範囲でお答えいただきたい。

事務局（宮野部長）：1点目については私からお答えする。充分な説明にはならないかもしれないが、千葉市の文化行政については、先生方も他の事業を比べると正直なところ思うような予算がかけられていないと感じておられると思うが、現在の千葉市の文化行政については、今年度から文化振興施策と文化財保護事業を分け、文化振興施策に関しては市長部局の市民局の担当となり、文化財に関しては従来通り教育委員会の所管というように、文化行政でもまだそういった二重構造

のようなところが残っている。特にその中の文化財事業について、他の政令指定都市の経費については今手元に資料がないので数字で示すことはできないが、それ以前の基本的な考え方として、文化財事業に今後どのように取り組んでいくのかについて、他の政令指定都市では、文化財保護課や文化財課が市長部局にあるところもあれば、教育委員会にあるところもある。やはり文化財の保護を今後とも施策の上位に位置づけて、継続的に持続していくためにも、私どもは文化財課の設置を強く要望したが、残念ながら組織上文化財課はできず、生涯学習振興課の1係で整理されてしまった。これについては力不足を痛感しているが、先ほど野村委員さんから例えばゴルフ場とか周辺の施設の充実にはたいへんお金をつかうようだがというご指摘があったが、それはその通りで、その何分の一でも回していただければという気持ちが無いわけではない。しかし、先ほどもいったように、もう出来るところから実績を残していくしかないと思っている。無い物をいくら作ってくれといつてもなかなか難しく、ではこれまで何をやっていたんだといわれたときに示せるものが無いようではいつまでたっても今の形で固定されてしまう恐れもある。残念ながら今のところ特に文化財の保護については、市内部での組織上の取り扱いはそうなっており、それがとりもなおさず予算にも反映しているという気がしている。しかしどいようだが、現状で満足しているということではない。また、数字についてはまた後日ということにさせていただきたい。

野村副会長：委員としては、ある程度なにか成果が出ればよいのだが、1～2年話し合っていても形になるものがなかなか出来ないようだ。

事務局（宮野部長）：私の勝手な考えかもしれないが、部長になって3年目になるが、常々感じているのは、千葉市の場合、文化財保護のマスタープランのようなものが存在していない。もう一ついうと博物館の基本構想的なものもよく分からないというか、具体性がどうも見えてこない。結局予算を要求していくときには基本的な考え方がまずあって、それをどうやって計画的に進めていくのかという構想が推進力になると思う。文化財保護条例の改正も法律の改正にともなって行ったが、どうもそれだけでは財政当局に訴える力が弱かった。やはりこれからはそうした基本的な構想なり、基本的な計画なりといったものを作っていくかないと今までたってもこの状態は改善されないのではないかと思っている。

事務局（芦田）：市史研究講座の会場についてお答えする。現在美術館の講堂を借りて開催しているが、確かに音響面などで問題はあるのだが、なかなか他に160人規模の人が入り講座できる場所が無い。これ以上広い場所ということになるとホールになってしまい。ホールになると使用料が格段に上がってしまう。現在、美術館に使用料を支払っているが、美術館の良い点は比較的空いているため講師の都合などで急遽変更する必要が生じた場合でもある程度対応が効くということである。そうしたことで長く使わせてもらっている。今後、もしホールで開催するにしても机がなかったりで難しい面もある。市の文化センターの講座室でも大きい部屋でも120席、生涯学習センターでも80席である。したがって、多少の不満が出るかもしれないが、しばらくはこのまま美術館でいくしかないのかと

思っている。

野村副会長：講堂としては160人くらいが限界なのだろう。

白井委員：市史研究講座はいつも応募者が多く、洩れる人も多いのだが、私も実は本年度この講座を受講させていただいた。この講座を受講するとやはり千葉市の歴史について興味深い内容が聴けたと感じたので、いつもこれだけ応募者が多い理由は納得できる。ただ、実際みていると定員に対して途中が少し参加者が少なくなっている。それを見込んでもう少し多く採るとか、あるいは有料というのを打ち出せば本当に聴きたい人だけが応募して来るのではないかと思う。

吉田会長：先ほど報告の時にこのあたりが限界ではないかといった意味は何か。事業予算の問題か。私が思ったのは場所のキャパシティーが唯一の障害ではなくて、応募者が多いのであれば、例えば回数を増やすとか内容を多様化するとか色々検討できる可能性があるわけで、アンケートの中を見ると真夏を避けてほしいとかあるにも関わらず真夏に行うとか、そういったところが非常に固定的な感じがする。それをもっと柔軟に考えれば今の予算規模とか力量の中で改善できるのではないかと思うがどうか。

事務局（芦田）：改善できる点は改善していきたいと考えている。特に開催時期に関しては先生方の都合もあったのだが、来年度以降、真夏を避ける対応をしたいと思っている。先ほど限界といったのは、各時代別に5人の方に講師を確保し、しかもその中で統一テーマを持って、千葉市に関係した内容で設定するとなると非常に狭められてしまうので、こうした意見に対応するには限界があると個人的に考えている。ある程度幅を広げて千葉市に限らず地域という枠で歴史を考えてもよいのではないかと思っている。かといって千葉市から完全に離れてしまうと千葉市史研究講座ではなくなってしまうので、そうしたものも入れながら歴史のことが聴ける内容で今後も考えていきたい。会場については既にある場所で、しかもこの近くでということで考えると、何を捨てて何を取るかということになるのだが、今のところ収容できる人数を優先しているので、そうなると美術館ということになる。

吉田会長：前も聞いたかもしれないが、研究講座の講師は誰が考えて、誰が依頼しているのか。

事務局（芦田）：担当が考えて依頼もしている。

吉田会長：もっと広く、この市史編纂会議や市史編集委員会の先生たちも含めて、講師の案を出していただくことをもっと積極的にしてはどうか。それはこのアンケートの中にも千葉氏ばかりの千葉市史はもういいという感想もあるが、べつに市と関係無く色々な歴史の話を聞きたいという人もいっぱいいるわけで、千葉市民が聴くのが千葉市史の講座なのであって、別にその内容が直接千葉市に関係していないくとも色々なテーマがあり得ると思う。

今井委員：研究講座は5回通して募集をかけていると思うが、今回のテーマであれば別々に募集をかけてもいいのではないか。実は自分が担当の時にも思っていたが、なかなか手が無く、集約したり、返信したりと手間がかかるのでやらなかつたのだが、もし個別に募集をすることができればだんだん減ってくるというようなこ

とはなくなると思う。

吉田会長：事前に申し込みをしなければならないという方法は変えられないのか。そういう講演会も普通にあるのではないか。事前申し込みをした人には券かなにかを渡すのか。

事務局（芦田）：往復葉書の返信部分が受講票となっている。

吉田会長：申し込み制を止めれば、そこの手間も含めてお互いのコストの面でも大幅に削減できると思う。先着何名で、満員になったら申し訳ありませんでいいのではないか。

野村副会長：2回位に分けられるのではないか。6月の3回と7月以降の2回を分けるとか、そういう方法は可能ではないか。2回に分けて募集すれば後半の穴埋めはできると思う。一回ごとでは告知する方法が無いだろう。市政だよりでも間に合わないのではないか。

白井委員：3回ずつ2回に分けるというのはよいかもしれない。始めに落ちた人も後半受講できる可能性がある。

野村副会長：まあ、検討してみてはいかがか。

事務局（宮野部長）：先ほどから委員の皆様のご意見をうかがって、やはり昨年と同じ様な説明をし、同じ様なご意見をいただいているということはこれは改善努力が足りないと言わざるを得ないと思う。先ほど、インターネットによる申し込みについての要望も35%の人からあるということで、今後年々そうした操作に慣れた人が増えてくると思う。だからただ単に往復葉書だけの申し込みでよいのかという点の見直しの問題と場所の問題、また、有料化してはどうかとのご意見もあったが、千葉市の台所事情からすると若干はいだいてもいいんじゃないかと思う。例えばテキスト代だとかいわゆる実費に近い費用については取らせていただくことも含めて、やはり見直す時期だろうと思う。せっかくこのようなアンケート結果を整理をしているわけなので、これだけいただいて毎年同じことをやっていたんでは、こういった意見を出してくれる人もだんだんいなくなってしまうのではないか。だから飽きられないうちに取り組むことこそが必要だろうと思うので、いただいたご意見を今後活かしていくようにしたい。

吉田会長：その点、よろしくお願ひしておく。他になにかご意見があれば。

今井委員：史料調査収集・整理事業について、ここに出てる大堀家の数軒後ろに大堀豊さんというお宅がある。そのお宅にも先代の段階で大堀家関係の史料が一部分かれて行っているようなので、調査対象に入れておいていただきたい。

吉田会長：いまむかしの内容についてはどうか。今度の号はだいたい何頁くらいの予定なのか。今回の内容は講演の記録と調査報告の2本のみのようだが。

事務局（芦田）：聞き取り調査の報告が膨大で、全体で100頁くらいになる予定である。

野村副会長：だったら表紙はB案でよいのではないか。

吉田会長：本当はもっと論文とか研究ノートがほしいし、市史の研究会で行われていることも活動の記録に入れてほしい。こうした日常的な市史編纂研究活動をもつと反映させる紙面作りということを考えるとちょっと内容が偏っていないかと思

う。例えば神山さんが11月に行った研究会の報告についてはどうするのか。

事務局（芦田）：これは次の22号に掲載することを予定している。研究会や講座などでご報告いただいた内容については、今後とも何かの方法で活用することを考えていきたい。

吉田会長：1,000冊というのはかなりの量である。もっとこういった活動をお知らせする媒体としては、表紙だけでなく、内容を充実させる努力が必要ではないかと思う。表紙案についてはどうか。

野村副会長：もし、内容をできるだけ盛り込みたいということであればB案でもよいのではないか。ただ、これだとビジュアル的でないので市民には受けないかもしれない。

吉田会長：私が前に言ったことでもあるが、いまむかしをバックナンバーとか見ているとパッと中に何が書いてあるかわからない。このB案でいえば簡単でいいから写真のキャプションを入れるとかしたらどうか。

事務局（芦田）：一応表紙をめくったところに写真の解説は入れるが、表紙にもキャプションがあった方がよいか。

吉田会長：いや、それはあまりたいしたことではない。

野村副会長：これは一般市民が対象なのか。

事務局（芦田）：1,000冊の内、800冊は公共機関や関係市町村に配付している。残りの200冊が販売分となる。

野村副会長：内容はかなり専門的ということか。

事務局（芦田）：そうです。

吉田会長：タイトルは碎けた感じがするが。

今井委員：表の方に目次が出ると非常に専門誌的な印象を受けてしまうのではないかということで、できるだけそういうのはやめようという意見が当初はあったのだが、実際配付が多いということはどちらでもいいような気がするので、私もB案の方に賛成である。

白井委員：私も表紙に目次が載っていれば中に何が書いてあるか一目でわかるのでB案でよいと思う。

吉田会長：三浦先生いかがか。

三浦編集委員長：私もB案で賛成だが、目次は別にも入るということか。

事務局（芦田）：見開きにも目次が入る。

三浦編集委員長：見開きに詳細な目次が入るということは、表紙には論文名のみ載るということか。

事務局（芦田）：主な内容が載る。

吉田会長：貢まではいらないということもあり得る。

三浦編集委員長：この写真もいらないというご意見はないか。

野村副会長：A案の表紙だけ見ると楽しそうなことが書いてあるんじゃないかなと思う人もいるのでは。

三浦編集委員長：やはりこの「千葉いまむかし」という見出しが非常にユニークである。それが普通一般の方には何か楽しそうなことが書かれているような感じを持

たれてしまう。そのわりに内容が意外と工夫が少ないのでないかという感じを持っている。

吉田会長：本当にその通りだ。ただ、冒頭の紙上古文書講座などはそうした工夫の一つではある。この写真は講演の記録と関係しているのか。

事務局（芦田）：この写真は明治41年に千葉町が鉄道連隊を千葉に誘致した際に千葉駅前で祝典をやるのだが、その時の絵葉書である。講演記録の中にその話しが出てくるので関連するということでこれを表紙にした。

吉田会長：では、他になければ編纂会議としてはB案を推す声が多かったということで、他に何かあるようならまた後で出してもらうことにして、次に移ります。

平成19年度の市史編纂関係の事業について、残りの、市史研究事業と市史協力員の活動について担当より報告をおこなった。

<質疑応答>

野村副会長：市史協力員に現在は8人が登録されているということか。

事務局（芦田）：そうです。

野村副会長：それからせっかくボランティアで協力いただくわけなので、名前を市政だよりなどで紹介してあげたらどうか。そうすれば張り合いが出るのではないか。

事務局（芦田）：おそらく市政だよりでは難しいと思う。ボランティアはここだけでなく現在様々な所で活動しており、その人数は膨大で、名前だけで紙面が埋まってしまうと思われる。例えばいまむかしの活動の記録のところに活動内容と登録メンバーの名前を載せることは可能だと思う。

野村副会長：それでも結構だ。

吉田会長：代表の方にまとめて短い文章を書いてもらってはどうか。

事務局（芦田）：今号に間に合うかどうかは微妙だが、次号には掲載したい。

吉田会長：今号に間に合わずということでやってもらいたい。

事務局（芦田）：わかりました。

野村副会長：これは編纂会議でなんとかボランティアをということを提言したから、それが実現したことはうれしい。

事務局（宮野部長）：重複するかもしれないが、千葉市の生涯学習センターで生涯学習ボランティアセンターというのがあり、そこにボランティアの皆さんを登録していただいている。例えば公民館でこうした講座をやりたいといったときにこの上級コースを卒業された方を講師として活用していただくとかそういうことが可能となる。生涯学習ボランティアの名前はボランティアセンターの名簿の中に搭載されており、公表もされている。そういう形での活用も可能である。今後、そういう方が年々増えていって地域で活用していただけるようになると考えている。

吉田会長：先ほど部長さんがいわれた、お金はかけないで、やれるところから実績を重ねるというのはかなり重要な事ではないかと思う。

事務局（宮野部長）：幸いにして、団塊世代の方々が昨年くらいからどんどん地域に帰ってきている。特に働いているときは地域にどんな歴史があるのか分からなかつたのが、定年後に地域を振り返って見ようとするところから関心を持つようになってきているので、需用がかなり増えてきていると思う。こうした古文書の勉強をしてみたいという方の要求も増えてきているので、例えば受給バランスが取れるように上級コースの方々が各区ぐらに登録ができるようになればいいと思っている。

野村副会長：古文書が膨大にあってなかなか整理がつかないといった話を前に聞いたような気がするが、その方々ができるかどうかはともかく、色々なお手伝いをしていただける場があるということはたいへんよいことだと思う。今後の活発な活動を期待している。

事務局（宮野部長）：ボランティアセンターで登録はしても、その方々がどのくらいの力量があるかわからない。客観的な評価ができないので、まだ依頼もそれほど多くないのだが、こういう講座の上級コースまで修了した方々が実績を残してくれることが、ボランティアが活用される弾みにもなっていくだろうと思っている。今、全体で500人くらいが登録されている。

吉田会長：今あちこちで何とか検定みたいなのが流行っているが、あれは基本的には金儲けだとは思うが、例えば古文書検定などを有資格化するかどうかは別にして、そういうのは自治体レベルできちんと資格認定するというのは大事かもしれない。

事務局（宮野部長）：だから私は古文書の上級コースを修了しているというような事を備考欄に書いて、そういうところから選んでいただけるようになればよい。

吉田会長：結局そういうことをきちんとやるために、古文書の初級中級講座をもっと充実していかなければいけないという事に連動していくことになる。やはり戦略が重要ではないかと思う。では時間もあるので、次の議題3に移る。

### 議題3 今後の事業予定について

今後の事業予定について、計画している刊行物とその他の活動についての概要を説明した。特に「歴史読本」について前回以降の経過を説明し、「平成19年度講座の参加状況及びアンケート結果報告」の結果についてもあわせて担当より説明した。

#### <質疑応答>

野村副会長：歴史読本が残念ながら今5か年ではできないようだが、プロジェクトチームというか編集委員会が、今千葉市が持っている史料を駆使して市のオフィシャルガイドブックのような歴史読本を出来るだけ早く作るための準備をしたらどうかと思う。なぜかというとこのアンケート調査の結果にもある通り、この人々は皆歴史に关心が高い人ではあるが、歴史読本を購入したいというのが72%～76%希望があるということなので、これを市民に広げても千葉市の歴史を知りたいという人はかなりの数いるはずだと思う。従って場合によっては編集委員会なりプロジェクトチームが執筆したものを民活で本として出すことが出来ないのかという感じがする。今はPFIなどで公共施設の箱物まで民活でやる時代な

のだから、そうしたきちんとしたオフィシャルな委員会が千葉市の歴史の本を書いてくれたら民間で刊行しましょうというところがあるかもしれない。もしだめということであればそれでもよいのだが、検討してみてはいかがかと思う。

吉田会長：非常に具体的な提案だと思うが、他の方はいかがか。いつも長野県の飯田市の事例で恐縮だが、あそこもお金が無くて、今年度は市政70周年ということで、3冊の本を出した。1冊は満州移民をテーマとした本で、現代史料出版というところで出版してもらって、それを市が何部か買い取り、出版社は出版社で売る。表紙だけ別刷りだが市でも同じ本を売っている。そういう形も可能である。それからもう一つオーラル（聞き取り）の本も出したのだが、これは簡易製本的なもので地元の出版社に非常に安く作ってもらったが、内容はきちんとしたものができる。これなんかは何百万単位でかかるものではない。今は数十万くらいでもきちんとしたものが作れる。今、野村委員があっしゃったように民活とか色々な方法が考えられるので、やるとなれば色々なアイデアが検討できると思う。

野村副会長：市政だよりなどでこうした本が出来ましたという事が載れば、そうとうな人が買ってくれるのではないかと思う。

吉田会長：市の財政のことよくわかるが、その計画に載らないからといって、ここでこれまでの議論の積み重ねからいいたら、これがずっと先送りということになれば本当にやる気がなくなってしまう。なんらかのエネルギーの受け皿をきちんと事務局の方でも考えて欲しいと思うが、ただプロジェクトチームをつくるとかどう実現するかもわからない企画案を作るのではなくて、こういうふうにやるんだということで走らないとこういうものは実現しない。

野村副会長：市制施行何年とか千葉開府何年とかこうした節目があれば、その時に出せば売れるんじゃないかと思う。

吉田会長：政令指定都市になって何年か。

事務局（宮野部長）：15年になる。

吉田会長：千葉市になって何年か。

事務局（宮野部長）：大正10年だから、86年になる。委員の皆さんのが持ちはよくわかるし、これは私の独り言になるかもしれないが、先ほども言ったが団塊世代の方々が地域社会で出てこられている。そして自分の周辺の歴史を知りたがっているという人が増えてきている。例えば他の審議会などに出ても、審議会の委員の方々から異口同音にそうしたことを言われる。やはりこの時期をはずしてしまったら何の意味もない。今が一番需用があると思っている。安直かもしれないが、以前白井先生にお願いして中学校の副読本を見せていただいたが、大人でも十分耐えられるような内容であった。そういうものをある程度ベースにしながら、例えば市史編纂会議として編集をして千葉日報さんで出していただくとか、これは独り言だが、そういうことも可能なかどうかわからないが、もし可能であれば市の5か年や予算云々とは関係なくなる。しかも、アンケートの中では2,000円くらいであればお金を払ってもいいという方が非常に多いわけで、そのくらいの対価を払っても十分耐えられる内容であれば、先ほど会長がいわれた戦略を練れば出来なくはないのではないかと思う。とにかく本当に今ほしがっ

ている人がいっぱいいる。

野村副会長：昔、千葉日報で千葉開府850年かなにかで文庫本くらいの厚い本を出したことがある。あれは誰が書いたのか知らないが、ある程度オフィシャルな所で作ってくれれば出したいという所は結構あるのではないかと思う。その面でプロジェクトチームなりの立ち上げを進めてもいいのではないかという気がする。

事務局（宮野部長）：正直言って、次期5か年を待っているともう団塊の世代がほとんど社会で出てしまって、その間千葉の歴史を振り返る人たちが何を見ながら理解を深めたらいいのか、ちょっと薄ら寒くなるような状況なので、あまり時間をかけないで出来る方法を、もしプロジェクトチームを立ち上げていただければ具体的に問題点を絞り込んで詰めていきたいと思う。

吉田会長：私自身も団塊世代なので、5～10年先になればだんだんエネルギーが落ちてくると思われる。

野村副会長：次期5か年というのはいつから始まるのか。

事務局（宮野部長）：平成23年度からになる。22年度までが現在の第2次5か年計画の計画年度である。せっかくいいものがあるのだから、智恵を働かせられればなんとかならないかと思う。

吉田会長：いまむかしでも800部が献本だが、行政はこうしたことを前提とした出版計画なのだと思う。そうではなくて献本分は予算化するけれども、基本は市民の方々に申し込んでいただいて購入してもらうということをベースにした刊行事業計画を立てれば、市の財政にそれほど負担をかけず色々な形ができると思う。もしそれでもだめだということであれば、完全に民間ベースでもいいから、ただスタッフは事実上千葉市史をなさっている方々を中心にしていい本を作るという。これは一種の市に対する批判になるのだが、ただ、こうした活動が長期的に見れば、市史の編纂事業なり市民の方々の当面するニーズに一番よく答える道であるならば、私はそういう努力をするしがいがあると考える。例えば国の事業などで補助は得られないのか。

事務局（宮野部長）：最近、文化庁が色々な補助事業に積極的に乗りだしているようだ。

吉田会長：プロジェクトチーム作りを検討するということで、どうやるかということまで議論していると半日くらい過ぎてしまうので、私はせっかくなのでこの市史編纂会議の方々がプロジェクトチームのメンバーになって進めるのがよいと思う。その進め方などについては事務局と相談しながらやりたいと思う。

時間が迫ってきたので、その他にどうか。研究会は3回ではなくて、もっと増やしていくべきだと思う。今年度にしても結局11月と2月、4か月に2回やっているということになっている。当面は無理かもしれないが2か月に1回くらいやるつもりで、当面年3回から4回くらいやることを目標にすることは可能ではないか。いわゆる研究的な報告だけではなくて今井さんがやられている活動内容とかも研究会の報告内容になり得ると思う。

事務局（宮野部長）：是非近いうちに今井さんの活動されている所でこの編纂会議などもやってはどうか。また勝手なことを言ってひんしゅくを買うかも知れないが。

吉田会長：それはいい考えだ。次回是非、それで今井さんが報告するというのがいい。では、最後に議題4で何かあるか。

#### 議題4 その他

事務局より次回の開催時期について、7月頃の開催でどうかと委員の意見を求める。

吉田会長：本当はもう少し早く開催した方がいい。5月か6月頃の方がよい。つまり年度がはじまって色々動いた後に本年度の事業予定をいわれても困る。

事務局（芦田）：では、また調整させていただく。

吉田会長：では、他に無ければ以上で議事を終了します。

問い合わせ先 千葉市立郷土博物館市史編纂担当  
TEL 043-222-8231